

「朝鮮」という呼称について

「朝鮮」と「古朝鮮」 韓国の歴史教育では、紀元前に国家としての「朝鮮」が成立したとされている。それは、山東、遼寧両半島を含み朝鮮半島北部から中国東北部にわたる古代国家である。その後、14世紀末に李成桂が高麗を滅ぼして新王朝をつくった。この王朝は古代以来の諸王朝を受け継ぐ王朝としてその名を再び「朝鮮」と称した。韓国では、二つの「朝鮮」を「古朝鮮」「朝鮮」と呼んで区別している。日本では「衛氏朝鮮」「李氏朝鮮」と呼ばれて区別されてきた。

「近代化胎動期」としての「朝鮮」 韓国では、古朝鮮を国家形成の出発点、「朝鮮王朝」をそれを受け継ぐ完結点と見なしている。それゆえ14世紀末の朝鮮王朝の成立は、中世の高麗王朝末にはじまった新しい社会変化の結果とし、朝鮮王朝以降を近世としている。つまり、王家が王氏から李氏に代わったという単純な変化ではない。

また、「朝鮮」は文化史上の呼び方では「李朝」ともいう。「李朝文化」とか「李朝家具」というような場合である。韓国では、キリスト教とヨーロッパの科学技術が伝わった17世紀以降の朝鮮時代を「近代化胎動期」としている。しかし、文化的には、ヨーロッパ文化とは対極的な儒教文化が特徴であり、現代の韓国の伝統文化の基礎となる時期である。その観点から一般的には「李朝時代」という文化史上の呼称も使われる。

日本の近代化における「アジア蔑視」の呼称 日本では、近代化の過程で福沢諭吉の「脱亜論」が示されたようにヨーロッパとの比較でアジアへの蔑視観が広がった。その一つがアジアは古代以来単に支配者の王家が交代するだけの発展しない地域という歴史認識だった。「衛氏朝鮮」「李氏朝鮮」というように王家の姓をつけて区別する歴史観はそのような時代背景で創られた。植民地時代の韓国では、日本本土と同じくこの呼称による教育が行われた。したがって「古朝鮮」「朝鮮」とい

う区別は植民地時代の歴史認識を批判的に改善する意味もある。

歴史用語の変化と「朝鮮」という呼称 生徒の歴史学習の深まりを判断する一つの指標が、歴史用語を正しくより多く用いて説明できるかを評価することであるように、「歴史用語」の理解は学習上重要なことである。しかし、歴史用語も社会とともに変化する。戦前は中国を「支那(シナ)」と呼んだが戦後はそう呼ばなくなった例などある。「支那」「李氏朝鮮」が遅れた社会のイメージを含んで教えられ、それを改善するため異なる表現を用いて歴史を描く可能性がある場合、教科書の執筆者は、用語を変える努力をする。「朝鮮」という呼称が偏見を持って使われていた戦前・戦後、「李氏朝鮮」という歴史用語を用いて直接的に「朝鮮」といわなかったことは、歴史教育の良心ともいえる。しかし日韓共通の歴史認識の重要性が主張される現在、国家の呼び方という基本的な部分で違う表現では、論議もしにくい。それが、「李氏朝鮮」という呼称に代えて「朝鮮」という呼称を使う例が増加している理由である。

15世紀の朝鮮は「先進国」 このように歴史用語自体が変化すると、「変わるのだから歴史を学ぶ必要はない」という声が聞こえそうである。しかし、変えることの大切さに気づきたい。韓国では、儒教文化を指標として朝鮮王朝を近世と扱っている。日本でいえば室町時代からが近世ということである。儒学をもとにした学問制度の整備、綿産業や陶磁器産業の発展、それらを結ぶ外交制度・交通網の整備。これらが進められたという意味で近代につながる近世と見ている。確かに15世紀の日本と朝鮮との関係を考えて、朝鮮はこのような制度の整った「先進国」であった。「遅れた朝鮮」という認識はこの時代の人々にはなかった。

従来の方を変える意味でどの用語を使うか執筆者が心を砕くところである。それは、教科書も人が描いた著作物にすぎないことを示している。それと同時に用語の暗記だけが歴史学習でないというあたりまえのことも示している。

(愛知教育大学助教授 土屋武志)